

タイトル：2025 年度 中東☆イスラーム研究セミナー（第 26 回）

日時：2025 年 12 月 19 日（金）～21 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階マルチメディア会議室（304）

「後ウマイヤ朝下辺境地域における軍司令官と代官」

中川流衣（北海道大学大学院）

本セミナーは私にとって「現地」調査への意欲を掻き立てるものであった。報告者たちの研究対象はヨルダンのシリア難民、パレスティナの風刺画、アラブ首長国連邦の外国人傭兵、オスマン帝国の外交、アンダルスの法学史料、そして私自身が専門とする後ウマイヤ朝時代のアンダルス西部境域の政治史であり、時間的・地域的に広がりを見せるものであった。これらの報告を聞く中で、私は自分自身の研究の「現地」とは何処なのかを考えさせられた。アンダルスを研究する上での「現地」に関して、あくまで地理的な観点のみを語れば、アンダルス西部境域は今日のスペインとポルトガルに跨っている。更にスペインの中でもメリダやバダホスなど後ウマイヤ朝時代のアンダルス西部でも重要な拠点であった都市では考古学的な研究が盛んであり、考古史的にも「現地」であると言える。他方後ウマイヤ朝のようなイスラームを軸とした社会という意味で近しいのはモロッコのようなマグリブの国家であり、アンダルス西部境域で活躍した在地有力者や軍人の中には祖先がマグリブに住んでいた者も多い（ベルベル人）。

私自身の報告に関していただいた質問やアドバイスは、私自身が研究の「現地」に赴く必要性を高めるものであった。特に研究成果がより大きなテーマに繋がっていない（研究の位置づけが分かりにくい）という御指摘をいただいたことは、私自身のアンダルスにおける境域（サグル）の政治史的な位置づけの不十分さに加え、マグリブの史料における境域や東方イスラーム地域における境域の比較、またそれら境域で活躍した人材の比較など、「イスラーム地域全体の中のアンダルスの境域」というより広い視点が欠如していたことに起因していよう。先行研究の再検討や史料の読解上の課題に加え、スペイン、ポルトガル、モロッコといった「現地」に赴き文字以外の手段で「アンダルス」を直に感じたいと強く感じたのは、私自身がアンダルス、後ウマイヤ朝、そして境域のいずれにも具体的なイメージを抱けておらず、現時点で研究を博士論文にまとめることはできないと感じたためであった。故に留学を経験された受講者の方々、また先生方の留学体験を聞くことは非常に有益であった。現地に行くための資金の獲得方法、現地研究機関とのやり取り、出発に先立つ日本での用意、現地での留意点など実際に現地に行かれた方々から聞ける話は貴重であった。現代中東情勢を専門とする受講生からは現地住人との暮らしぶりを聞くことができ、私自身が「現地」に赴いた際には史料の入手に留まらず、そこに住む人々との信頼関係の構築に努めたいと改めて感じた。

研究セミナーでは研究成果へのフィードバックに加え、自身の今後を考える上で貴重な

情報を得られる有益なものであった。今回得た知見は今後私がどの「現地」に行くとしても有用であり、また今回知り合った方々には留学や研究に関して相談させていただくことがあるかも知れない。研究セミナーに参加し相談できる頼れる仲間が増えたこと、これは無上の喜びである。